

2026年度(令和8年度)学校推薦型選抜

## 小論文問題

芸術文化観光専門職大学  
芸術文化・観光学部 芸術文化・観光学科

### 注意事項

1. 試験監督者の指示があるまでは、この問題冊子を開いてはいけません。
2. この問題冊子は表紙のほかに3ページあります。
3. 問題は1題2問あります。
4. 解答用紙が1枚、下書き用紙が1枚あります。
5. 試験監督者の指示に従い、黒のボールペン(消せるものは不可)で、氏名、受験番号を解答用紙のそれぞれ1か所の記入欄に記入しなさい。
6. 解答は解答用紙の所定の箇所に記入しなさい。解答用紙の裏面には記入してはいけません。
7. 解答用紙は横書きです。
8. 数字、アルファベットを含めて全て1マスに1字ずつ記入しなさい。たとえば、「10」は2マスを使って記入します。
9. 試験時間は90分です。
10. 試験終了後、問題冊子と下書き用紙は持ち帰りなさい。



次の事例1と事例2を読んで後の問いに答えなさい。  
なお、出題の都合上、原文を改変した部分があります。

## 事例1

デジタル機器による大量のデータ収集と分析が容易になり、学力テストや体力テストとは異なる手法で子どもの能力や変化を測ろうとする取り組みが生まれている。脈拍のような生体情報も対象となり、表情から読み取れない内面が探れるという。先進的な実践からは、新たな教育形態への期待と、管理目的に使われることへの懸念が同時に浮かぶ。

5月9日、ある公立中学校の1年3組の教室。1、2時間目の家庭科を担当する教諭(42)がノートパソコンを開き「授業開始」のボタンを押した。生徒31人の「集中度」をほぼリアルタイムで把握できるという測定システムの試験稼働が始まった。

生徒が装着したリストバンド型の端末から、脈拍が刻一刻と送信される。測定値から一人一人の集中度が割り出され、教員のパソコンに折れ線グラフで表示される仕組みだ。事前測定で個人の脈拍の特徴に合わせた調整を行っている。

授業の課題は衣服を選ぶ際の留意点。担当教諭の説明が終わり、生徒がインターネットや教科書から情報を集めてパソコンでまとめる作業に入ると、集中度は全体的に上向いた。

静かな教室で、担当教諭が手元の画面に目を落とす。高い集中度だった男子生徒のグラフが急降下していた。近づくに既に作業を終えていた。「手持ち無沙汰だったのか」と気づき、まとめ終わった生徒らには追加の課題を出した。

担当教諭は「集中していない生徒をすぐに見つけ、個別に支援する助けになる。全体の傾向からは、興味を引く授業ができていくかも分かりそう」と手応えを口にする。

システムを提供するのは元国立研究所協力研究員の男性とヘルスケア IT 企業。男性は「自分でコントロールできないから脈拍はうそをつかない」と話す。

男性は職場や介護現場での利用を念頭に、脈拍と健康、眠気などの関係を研究してきた。経済産業省から、教育分野で生かせる可能性があるとして、データ利活用に熱心なA市教育委員会を紹介された。

この中学校では1年半ほど前にも実証研究が行われた。校長は、測定結果の妥当性は高く「授業改善に役立つ」と判断した。保護者にはプリントで概要を伝えて同意を得ているといい「良い授業には経験と勤が大切だと言われるが、そこにエビデンス(根拠)を取り入れる意義は大きい。特に若手の指導力向上につながる」と期待する。

1年3組の生徒はどう受け止めているのか。「データを取って授業が良くなるなら歓迎」との意見や「集中していないのがばれるのはちょっと怖いかも」との声も。

同中学校は生徒に、集中度を成績には反映させないと伝えている。ある生徒は「集中していないと、退学にならないかな。まあ、信じましょう」とおどけて見せた。

(共同通信 2023年5月 配信)

## 事例2

B市教育委員会では、生徒が健康な状態で部活動を行うために、域内の中学校の一つであるH中学校において、熱中症リスクを把握するためのツールを導入することにした。それにあたり、B市教育委員会及びH中学校において、新たなツールの導入にあたって個人情報等の観点から必要な対応を行っている。

### ○ 導入するツールが有する主な機能のイメージ

- ・生徒はウェアラブル端末を装着する。ウェアラブル端末から心拍数や体温等の生体情報を取得し、熱中症リスクがある場合には通知を受け取ることができる。
- ・教職員はそれらの情報をもとに声かけを行うとともに、生徒は自らの状態を把握することができる。

### ○ ツールを導入するメリット

(生徒)

- ・熱中症にならないように、自身で運動量を調整し、休憩をとることができる。
- ・自分の体調をリアルタイムで客観的に管理し、運動の負荷等を確認できる。

(教員)

- ・生徒の体調をリアルタイムで把握し、適切なタイミングで運動中の休憩や声かけができる。
- ・熱中症のリスクを事前に把握することで、生徒の健康や生命を守ることができる。

### 【主に実施したこと】

<利用目的(ツールを導入することで取得するデータの利用目的)を特定する>

- ・B市教育委員会において、「部活動の指導に用いる」等の抽象的な利用目的ではなく、具体的に、何のデータ項目をどのように使用して指導するのか、まで検討した上で、利用目的を以下のように設定した。

部活動時に運動中の生徒の体調や熱中症リスクを把握して適切な声かけを行い、生徒の健康を守るため。

<利用目的やデータの取扱いの説明をする>

- ・H中学校の教職員が、生徒にプリントを配付して、特定した利用目的を明示し、データの取扱いについて説明した。
- ・また、中学生は15歳以下であり、本件についての判断能力が不十分であるため、保護者に連絡メールを配信し、同様の内容について説明をした。また、念のため保護者会においても保護者宛に口頭での説明と、同意の取得も行った。

### 【プリントに記載した内容】

<利用目的>

部活動時に運動中の生徒の体調や熱中症リスクを把握して適切な声かけを行い、生徒の健康を守るため。

<サービス概要>

このツールを用いることで、生徒本人や教員が、運動時の体調を管理し、熱中症を予防することができます。

<本ツールで扱う主な個人情報>

- ・氏名、年齢、身長、体重
- ・生体情報(心電の波形、心拍数、体温)

- 加速度情報
- 端末情報、位置情報

<データの収集手法>

本人がウェアラブル端末を装着することによりデータは収集されます。なお、データの収集は部活動時のみに限ります。

< 第三者提供の有無 > 大学、研究機関等への第三者提供は行いません。

< 保存期間 > データは、取得時から2か月後に削除します。

(文部科学省『教育データの利活用に係る留意事項』より)

問1 事例1は通信社が配信した新聞記事(報道文)で、事例2は行政が公表した公用文です。

- (1) 報道文では内容を取捨選択し、時には読者の感情に訴える表現をとることがありますが、公用文では内容を過不足なく網羅して論理的に書くことが求められます。それはなぜですか。「事例1の報道文は…を目的とし、事例2の公用文は…を目的としているから。」という一文で答えなさい。
- (2) 事例1と事例2の記述では、データの活用方法はどのように異なるか、どのようなデータから何を把握しどのように活用しているかが分かるように「事例1は…、事例2は…。」という一文で答えなさい。

問2 教育現場における生体情報の活用のメリットとデメリットを挙げ、生体情報を倫理的にかつ効果的に活用するためにはどのような配慮が必要か、あなたの考えを600字以内で述べなさい。